高知学園短期大学紀要　第49号（2019）：45－58

報　告

小学３年生を対象とした歯みがき指導における学生の学びと課題

野村　加代[1*]，坂本 まゆみ[1]，中石　裕子[1]，和食　沙紀[1]，内田　智子[1]，大野　由香[1]

要約：平成22年度から，Ｘ市教育委員会とＸ市保健所とＸ市立小学校と本学医療衛生学科歯科衛生専攻の連携のもと，乳歯から永久歯への歯の交換時期にある小学３・４年生を対象に歯みがき指導の取り組みを開始した。今回，平成29年度２年次学生が小学校６校の小学３年生に対して歯みがき指導を行い，指導後に自由記載した振り返り感想を質的に分析し，ＫＪ法を用いてカテゴリー化を行い，歯みがき指導における学生の学びと課題を明らかにした。また，実習後に小学校クラス担任あるいは養護教諭の指導評価は一覧にして分析した。その結果，学生が歯みがき指導時にできた点できなかった点，改善点が明らかとなった。 我々が学生に歯みがき指導時に伝えるべき課題は，学童が正確に歯肉の観察ができるための方法を適切に指導すること，正確な知識と技術が習得できるように指導をすること，指導案と指導法を熟知させること，アクティブラーニングの取り組みを熟知させること，であると考えられた。

キーワード：歯科衛生，学生，歯みがき指導

はじめに

高知学園短期大学医療衛生学科歯科衛生専攻では，学生が将来専門的職業人として継続的な口腔衛生管理と健康支援ができるように，患者さんや地域の一人ひとりの健康意識の向上と保健行動の定着を目指し学外実習に取り組んできた。

昭和50年より現在まで，保育園や幼稚園の５歳児及び，依頼のあった小学校の３年生を対象に歯みがき指導を継続して実施してきた。また，平成22年度からは，Ｘ市教育委員会とＸ市保健所（以下行政という）とＸ市立小学校と本学の３者連携のもと，乳歯から永久歯への歯の交換時期にある小学３・４年生を対象に，取り組んできた。学童への指導目標は，正しい歯みがき方法を知り，歯肉炎にならないために自分で予防できるようになることである。さらに平成25年度から，Ｘ市立中学校１年生の生徒に対する歯肉炎予防の取り組みも開始している。文部科学省の「生きる力」をはぐくむ学校での歯・口の健康づくり[1)]は，21世紀を豊かに生きることのできる子どもたちの育成をめざした取り組みとして位置づけられており，心身の発達の段階からみた課題も示されている。学齢期中学年においては，学校で取り組むべき課題として「歯肉炎の原因と予防方法の理解」が上げられている。本学では，学童の指導目標として「正しい歯みがき方法を知り，歯肉炎にならないよう自分で予防できるようになること」として指導を行っている。佐藤[2)]は学童の歯科保健教育の効果の研究の中で，学齢期は歯口清掃などの基本的歯科保健習慣を身につける時期であるため，自己の口腔に関心を持ち，予防に必要な知識や技術を学ぶことは今後の健康維持に影響を与えると

[1]高知学園短期大学　医療衛生学科歯科衛生専攻　*Email: nomura@kochi-gc.ac.jp

述べている。また，口腔の健康維持には，学校，家庭，地域との連携が必要であることも指摘している。

本学学生の履修科目と履修方法については，次のとおりである。ライフステージに応じた歯と口の健康教育支援が実践できるように，また全身との関連について講義・実習の授業の中で，専門的な知識と技術を１年次から３年次までの３年間で習得できるよう段階的に学んでいる。

１年次では，歯科保健指導の概要および，基礎知識や，ライフステージにおける歯科衛生の介入方法を〈歯科保健指導実習〉において学び，〈歯科保健指導基礎実習〉においては，歯のみがき方の種類や方法を説明できること，また技術を身につけ，対象に応じた指導ができることを到達目標としている。

２年次では，１年次に学んだことを基に，幼児期・学齢期の子どもたちの口腔内の特徴と，心や身体の特徴を理解して，個人指導，集団指導の方法を〈健康教育〉で学ぶ。さらに学外実習での指導計画を立案し，指導媒体を作製して，学内で練習を重ね，発表原稿の修正を加えて学外実践活動を行っている。小学校での学外実習の終了直後には，養護教諭や行政の担当者から学生が行った指導内容について，改善点や感想等を得ている。帰校後，学生は次回の指導に生かすための振り返りをしている。

３年次では，２年次までの学習内容の理論と実践を直接結びつけるために総合的に理解することを目的に，〈口腔保健管理法〉において生涯を通じた口腔保健管理の方法を学ぶ。３年次には，中学・高等学校あるいは特別支援学校からの歯みがき指導の依頼に対応している。

平成29年度は，29校の小学校において歯みがき指導を実施し，うち６校は医療衛生学科歯科衛生専攻２年次学生が小学３年生を対象に指導を行った。

今回，行政，小学校と本学の３者の連携により本学２年次学生が行った歯みがき指導における学生の学びと課題を明らかにすることを研究目的とした。

研究方法

１．　対象者

平成29年度医療衛生学科歯科衛生専攻２年次学生30名中26名（86.7％）から，歯みがき指導後の振り返り感想の研究利用について同意を得た。

また，Ｘ市立小学校で本学学生が歯みがき指導を実施した小学３年生を対象とした６校のクラス担任11名，養護教諭５名とした。各学校長より研究への同意を得た。

２．データ収集方法

学生は，平成29年６月８日から６月30日に，Ｘ市立小学校６校の小学３年生に対して歯みがき指導を実施し，指導後に振り返りのための感想を自由記載した。その記載された自由記載の内容を抽出した。 記載された内容は「できた点」「できなかった点」「今後に生かすための改善点」の３点である。また，実習後に小学校クラス担任あるいは養護教諭に，学生の歯みがき指導に関して５段階評価の評価表に記入してもらい回収したものを用いた。

３．分析方法

学生の自由記載した感想の内容を質的に分析し，ＫＪ法を用いてカテゴリー化を行った。

小学校クラス担任あるいは養護教諭の指導評価表の評価項目５段階は評価を一覧にした。

４．倫理的配慮

学生の自由記載した感想及び小学校の歯みがき指導評価表の本研究への利用については，対象者に口頭及び文書で説明し，同意を得た。

研究で得られたデータは，研究目的以外で使用することはなく，得られたデータは，コード番号によって管理し，個人情報を保護するために十分な処置をし,厳重に鍵のかかる保管庫で保管する。研究終了後一定の保存期間終了後には破棄をする。 研究の成果は公表されるが，個人が特定できるような情報は公表されない旨を対象者には伝え，了承を得た。

本研究は，平成30年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号第37号平成30年８月30日)

結果

１．歯科口腔健康指導のできた点（表１）

学生ができたと述べた内容のカテゴリーは［あいさつ］，［話し方］，［歯みがき指導の内容］，［進行］，［応用する力］の５つであった。

カテゴリー［あいさつ］のサブカテゴリーは『あいさつ』であり，カテゴリー［話し方］のサブカテゴリーは『声の大きさ』,『声がけ』,『コミュニケーション』であった。カテゴリー［歯みがき指導の内容］のサブカテゴリーは『媒体の取り扱い』,『準備・片づけ』,『指導時間(45分)』,『歯肉の観察』,『染めだし』,『ブラッシング』であった。カテゴリー［進行］のサブカテゴリーは『全体の把握』であった。カテゴリー［応用する力］のサブカテゴリーは『個別対応』であった。サブカテゴリーはこれらの12に分類できた。

カテゴリー［あいさつ］のサブカテゴリー『あいさつ』の内容では「あいさつが元気にできた」であった。あいさつとは，小学校に到着してから出会う教職員・学童・歯科口腔健康指導に関わる行政の担当者への「おはようございます。こんにちは。」のあいさつであり，また，授業(歯みがき指導)の取り組み前の学級担任へのあいさつや授業開始時の「よろしくお願いします」，終了後の感謝の意を伝える「ありがとうございました」のあいさつなどを含んでおり，社会人としての態度を学ぶことをめざしたものである。

カテゴリー［話し方］のサブカテゴリー『声の大きさ』の内容では，「声の大きさを意識した」,「はっきりと話せた」,「ゆっくりと話せた」であった。教室内の学童に聞こえるよう，声の大きさや口の開き方を意識して，はっきり，ゆっくりと話しながら，授業を展開したといえる。サブカテゴリー『声がけ』の内容では，「一人ひとりに声がけができた」,「積極的に声をかけた」,「目線をあわせて会話ができた」等であった。教室内での学童は班体制になっており，学生は担当する班の机間巡回をして積極的に関わりを持つことを意識しているといえる。サブカテゴリー『コミュニケーション』の内容では，「学童とコミュニケーションをとりながらできた」であった。学童の学習状況を観察しながら必要な支援を行えるように声をかけている。

カテゴリー［歯みがき指導の内容］のサブカテゴリー『媒体の取り扱い』の内容では，「媒体を間違わず準備し，発表できた」であった。教室で説明する際には，歯肉の観察を分かりやすく伝えるため，４つ切りサイズの画用紙に書いた媒体や，写真媒体を内容に合わせて張り替えながら進行している。指導媒体は，学童に対して丁寧で分かりやすく説明するためには，内容に合わせて準備することが重要である。サブカテゴリー『準備・片づけ』の内容では，「歯みがきが終わった学童への片づけの指導が比較的スムーズに行えた」であった。学童が５分間の歯みがき実施後に，学生はみがき残しがないか口腔内をチェックしたあと，学童に机の上の物品の片づけを指示しており，比較的スムーズに行えたといえる。サブカテゴリー『指導時間(45分)』の内容では，「今回３回目の実習で初めて45分以内に全ての実習ができた」,「時間内に終えることができた」であった。今回研究対象とした２年次学生が担当した小学校での歯みがき指導は３校目であり３回目であることから，授業時間の45分を守って，全ての実習内容が行えている。ある程度は体験を重ねることで習得できるものだといえる。サブカテゴリー『歯肉の観察』の内容では，「歯肉の観察の説明ができた」,「観察できていないところを指示をすることができた」,「歯肉のかたさの説明が分からない子に指示出来た」であった。歯肉の観察をする学習プリントには，学童が歯肉を観察する部位は，上下真ん中の前歯の歯と歯の間の歯肉と，その左右の歯と歯の間の歯肉で合計６カ所が書いてある。その時観察するポイントは，①色，②形，③かたさ，④出血の有無についてである。健康な歯肉なのか，歯肉炎になった歯肉なのかを学童自身

にチェックをしてもらって該当する箇所に〇印を記入してもらっている。歯肉の観察ポイント①歯肉の色については，健康な歯肉の色は「ピンク色」で，歯肉炎になった歯肉は「赤色」である。歯肉の観察ポイント②歯肉の形については，健康な歯肉は「三角形」で，歯肉炎になった歯肉は「丸く厚い形」と表示している。歯肉の観察ポイント③歯肉のかたさについては，手をぎゅっと握って親指の付け根部分を押したかたさであれば健康な歯肉でかたい，歯肉炎になった歯肉はやわらかくぶよぶよしていると表示しており，学童には実際に歯肉を触って確認してもらっている。この時触ったあと歯肉から出血があれば，出血「あり」，出血がなければ「なし」を〇印で囲む。学習プリントの歯肉の観察ポイントの文字（赤，丸く厚い，やわらかい，あり）のところに〇印が１つでもあれば歯肉炎になっているかもしれないことを学生は説明をしている。さらに「正しい歯みがき方法をすることで歯肉炎を予防することができる」と学童には説明を加えている。サブカテゴリー『染めだし』の内容では，「どこを染めたらいいのか分からない学童に鏡を見てもらいながら場所を言う事ができた」，「赤く染まっているところはみがけていないところと教えることができた」，「しっかり染めだしができているのか鏡で確認してもらえた」 であった。 学生は染めだし液のついた綿棒を使って学童自身に口腔内の汚れがどこにあるのかを観察してもらい，歯と歯肉の境目の染め出しができているかをポイントにして説明を行っている。サブカテゴリー『ブラッシング』の内容では，「磨き方が分からないと言われた所は丁寧に教える事ができた」，「どの作業でつまづいているのかを見ながら歯みがきの手助けをした」，「正しい歯の磨き方の説明ができた」等であった。教室前方で大きな顎模型を使って説明した後は，机間巡回をしながら個人の小さい顎模型でも同じように歯ブラシのあて方，動かし方を見てもらう方法を取ったり，学童がみがいている歯ブラシに手を添えて動かし方やブラッシング圧を体感してもらうなど工夫している。

カテゴリー［進行］のサブカテゴリー『全体の把握』の内容では，「スムーズに進行することができた」，「周りをよく見てタイムキーパーとしてできた」，「教室全体を見て，学童みんなに目を配って活動できた」であった。学生は，経験を重ねることにより45分の授業時間を管理しながらスムーズな進行ができるようになり，また教室全体を見回し学童に対する配慮もできている。

カテゴリー［応用する力］のサブカテゴリー『個別対応』の内容では，「遅れている子に気をかけながら進めていくことができた」であった。学童との関わりから学生自身の対応する力が備わってきているといえる。

学生は，小学校での学外実習を経験して，授業時間内で全体を把握した進行方法を学び，学童への声がけを通して戸惑っている内容や，分からない内容が見えてきて，スムーズな対応へ繋げていくことができている。

表１．歯科口腔健康指導のできた点

カテゴリー	サブカテゴリー	内　　容
あいさつ	あいさつ	あいさつが元気にできた
話し方	声の大きさ	声の大きさを意識した
		はっきりと話せた
		ゆっくりと話せた
	声がけ	一人ひとりに声がけができた
		積極的に声をかけた
		目線を合わせて会話できた

		めげずに声かけを頑張った
	コミュニケーション	学童とコミュニケーションをとりながらできた
歯みがき指導の内容	媒体の取り扱い	媒体を間違わず準備し，発表できた
	準備・片づけ	歯みがきが終わった学童への片づけの指導が比較的スムーズに行えた
	指導時間(45分)	今回３回目の実習で初めて45分以内に全ての実習ができた
		時間内に終えることができた
	歯肉の観察	歯肉の観察の説明ができた
		観察できていないところを指示をすることができた
		歯肉のかたさの説明が分からない子に指示出来た
	染めだし	どこを染めたらいいのか分からない学童に鏡を見てもらいながら場所を言う事ができた
		赤く染まっているところはみがけていないところと教えることができた
		しっかり染めだしができているのか鏡で確認してもらえた
	ブラッシング	磨き方が分からないと言われた所は丁寧に教える事ができた
		どの作業でつまづいているのかを見ながら歯みがきの手助けをした
		正しい歯の磨き方の説明ができた
		磨き残しがないか，鏡で確認してもらえた
		歯ブラシの持ち方が見れた
進行	全体の把握	スムーズに進行することができた
		周りをよく見てタイムキーパーとしてできた
		教室全体を見て，学童みんなに目を配って活動できた
応用する力	個別対応	遅れている子に気をかけながら進めていくことができた

２．歯科口腔健康指導のできなかった点（表２）

学生ができなかったと述べた内容のカテゴリーは［話し方］,［全員で注意すればできること］,［個人レベルの努力事項］,［指導者としての態度］,［状況判断能力］の５つであった。

カテゴリー［話し方］のサブカテゴリーは『声の大きさ』,『声がけ』であった。カテゴリー［全員で注意すればできること］のサブカテゴリーは『確認不足』であった。カテゴリー［個人レベルの努力事項］のサブカテゴリーは『説明がうまくできなかった』,『指導内容の工夫ができなかった』,『体調不良』であった。カテゴリー［指導者としての態度］のサブカテゴリーは，『学童に注意できなかった』,『指導者としての態度が不十分だった』,『時間配分が悪かった』であった。カテゴリー［状況判断能力］のサブカテゴリーは『全体の把握ができなかった』であった。サブカテゴリーはこれらの10に分類ができた。

カテゴリー［話し方］のサブカテゴリー『声の大きさ』の内容では，「声の大きさに気をつけすぎてセリフが詰まった」,「もう少し大きい声が出せたらよかった」であった。学生は声を大きく出すことは意識しているが，実際の現場実習でセリフが詰まったり，実習後の振り返りでもう少し大きな声が出せたのではないかと反省している。

カテゴリー［全員で注意すればできること］のサブカテゴリー『確認不足』の内容では，「染めだし液が足りなくて確認不足だった」,「前日の準備の最終確認をしなかった」,「確認不足で模型用歯ブラシを忘れた」,「媒体の貼り方が悪かった」,「タイマーをセットすることを忘れていた」等であった。これらは，一つ一つを常に全員で気を配

ることで防ぐことができたと考える。

カテゴリー［個人レベルの努力事項］のサブカテゴリー『説明がうまくできなかった』の内容は，「歯みがき方法の説明が学童にうまく伝えられなかった」，「出血の部位と毎日の歯みがきについて伝えられなかった」，「出血のある子どもに対して，少し不安にさせるようなことを言ってしまった」等であった。学童の歯肉から出血があった場合の対処方法や歯みがきをすることでどのような状態になるかなど，説明ができなかった理由のひとつとして基礎知識の不足があると考える。サブカテゴリー『指導内容の工夫ができなかった』の内容では，「子どもたちが分かりやすいように歯肉とは歯ぐきのことですという言葉をいれなかった」であった。説明の際，「普段皆さんが使っている歯ぐきのことを歯の肉と書いて歯肉といいます。今日から歯肉という言葉を覚えてください。」などの言葉を足した原稿づくりの工夫が必要であったと思われる。サブカテゴリー『体調不良』の内容では，「体調が悪くイライラした」であった。学生の体調管理の不十分さによるものと考えられ努力が不足していると思われる。

カテゴリー［指導者としての態度］のサブカテゴリー『学童に注意できなかった』の内容では，「ふざけて水を飛ばす子がいたが注意出来なかった」であった。学生は，指導者の立場で学童を注意して，学童が学習の続きに取り組むよう促す役割があり，その時の言葉がけや接し方を学ぶ必要がある。サブカテゴリー『指導者としての態度が不十分だった』の内容では，「笑顔でできなかった」，「染めだしの説明をする時に黒板ばかり見てしまって学童の方を見ていなかった」であった。学生は，緊張や自信のなさなどから相手の立場に立って物事を考え，行動に移せていなかったのであろうと考える。サブカテゴリー『時間配分が悪かった』の内容では，「時間配分が悪く，45分で終わらなかった」，「学習プリントの最後を記入してもらう時間がないと思って飛ばしたが，時間が余ってしまった」であった。学生たちが指導時間45分の時間管理をグループ全体で共有できていなかったためだといえる。

カテゴリー［状況判断能力］のサブカテゴリー『全体の把握ができなかった』の内容では，「一人ひとりをしっかり見ていくことが不足していた」，「作業に時間がかかる子を早めに見つけることができなかった」，「一人の子に時間をかけすぎた」等であった。一人ひとりを見る事，また時間がかかる学童を担当している時，他のグループメンバーがどのようにサポートし対応するのか打ち合わせが不足していたといえる。

学生ができなかったと述べた内容から，声を大きく出すことを意識しすぎてセリフが詰まったり，発表原稿の中で説明不足の所があり学童に伝わっていないことなど，個人の努力で改善できる内容や，グループ全員で取り組む内容があることが見えてきた。

表２．歯科口腔健康指導のできなかった点

カテゴリー	サブカテゴリー	内　　容
話し方	声の大きさ	声の大きさに気をつけすぎてセリフが詰まった
		もう少し大きい声が出せたらよかった
	声がけ	縦磨きへの声掛けができなかった
		片づけに入った学童ではなく，まだ歯みがき途中の学童に対する声がけができなかった
全員で注意すればできること	確認不足	染めだし液が足りなくて確認不足だった
		媒体の貼り方が悪かった
		説明中に次使うものを探して，ガサガサしてしまった

		タイマーをセットすることを忘れていた
		歯ブラシの持ち方を確認するのを忘れていて間違った持ち方をそのまま教えてしまった
		媒体を発表するときに間違えて飛ばしてしまった
		染めだしの説明時の媒体の貼り忘れがあった
		前日の準備の最終確認をしなかった
		確認不足で模型用歯ブラシを忘れた
個人レベルの努力事項	説明がうまくできなかった	歯みがき方法の説明が学童にうまく伝えられなかった
		出血の部位と毎日の歯みがきについて伝えられなかった
		歯肉の観察について，適切に助言を与えることができなかった
		出血のある子どもに対して，少し不安にさせるようなことを言ってしまった
	指導内容の工夫ができなかった	子どもたちが分かりやすいように歯肉とは歯ぐきのことですという言葉をいれなかった
	体調不良	体調が悪くイライラした
指導者としての態度	学童に注意できなかった	ふざけて水を飛ばす子がいたが注意できなかった
	指導者としての態度が不十分だった	笑顔でできなかった
		染めだしの説明をする時に黒板ばかり見てしまって学童の方を見ていなかった
	時間配分が悪かった	時間配分が悪く，45分で終わらなかった
		学習プリントの最後を記入してもらう時間がないと思って飛ばしたが，時間が余ってしまった
状況判断能力	全体の把握ができなかった	一人ひとりをしっかり見ていくことが不足していた
		作業に時間がかかる子を早めに見つけることができなかった
		自分の担当グループに集中し，全体の進行に気がつかなかった
		使用後の綿棒を学童が差し出してくれていたのに気付かず少し回収が遅れた
		一人の子に時間をかけすぎた
		グループ内での学生の役割分担ができていなかったため，学童を待たせた

３．歯科口腔健康指導の今後に生かすための改善点（表３）

学生が今後に生かすための改善点として述べた内容のカテゴリーは［進行に関わる全体の把握］，［内容の見直し］，［個人の努力］の３つであった。

カテゴリー［進行に関わる全体の把握］のサブカテゴリーは『準備物の確認をする』，『スムーズな進行をする』，『全体が見れるようにする』で，カテゴリー［内容の見直し］のサブカテゴリーは『指導内容を見直す』，『原稿を見直す』であり，カテゴリー［個人の努力］のサブカテゴリーは『個別対応ができるようになる』，『指導者としての態度を身につける』であった。サブカテゴリーはこれら，７つに分類できた。

カテゴリー［進行に関わる全体の把握］のサブカテゴリー『準備物の確認をする』の内容は，「忘

れ物がないよう朝も確認をする」等であった。指導用の媒体や消耗品等の忘れ物があると，学外実習が停滞することとなり学童に対して迷惑をかけることになることは学生自身十分に理解できていると思われるが，指導回数をこなして行く内に慎重さに欠けてくることが考えられる。サブカテゴリー『スムーズな進行をする』の内容では「しっかり説明をしてスムーズに進行したい」，「染めだしの片づけまでの指導は流れを一度紙に書き出して整理する」であった。学生は指導回数を重ねていても，対象学童は変わる為，スムーズに説明が出来ずにいたことが見受けられた。見直し，改善が必要な場合は，原稿の見直しを含め今一度流れを書き出し，自信を持って説明ができるように改善努力をしようとしている。サブカテゴリー『全体が見れるようにする』の内容では「担当グループの子が時間内にできるだけ終わるように全体を見渡すように努力したい」，「次回も自分の担当グループをしっかり見るようにしたい」であった。クラス全体の様子を見渡すことで，学童の動きを気にかけ指導時間内に終了することを意識していることがうかがえる。

カテゴリー［内容の見直し］のサブカテゴリー『指導内容を見直す』の内容は，「歯みがきのデモンストレーションでのセリフと動きを一致させるように改善したい」，「染めだしの結果，どうして赤くなっているのかを教えたい」であった。サブカテゴリー『原稿を見直す』の内容では，「歯肉を歯ぐきと言い換えたり，理解しやすい言葉に原稿を見直す」であった。学童の言葉の理解力はさまざまであり，分かりやすい言葉遣いに言い直し説明をしないといけないことは理解できていると思われる。

カテゴリー［個人の努力］のサブカテゴリー『個別対応ができるようになる』の内容は，「一人ひとり進むスピードが違うので遅れている子が追いつけるように手伝うようにしたい」であった。サブカテゴリー『指導者としての態度を身につける』の内容は，「何をしていいのか分からず困っている子には，積極的に声をかけていく」，「赤い所を落とすことに集中して，正しい歯みがき方法ができていない学童に対してしっかり説明したい」，「明日は最後なので前をむいて話せるように意識していきたい」等であった。学生個人が努力し向上していかなければならない内容が明確になっている。

学生が今後に生かす改善点として述べている内容から学生自身が指導者として求められる項目として，学童へ注意すべきは注意をすること，積極的な声がけや，　指導内容の理解度を見極めた対応など多岐にわたっている。個人の努力，グループ全体の努力で指導内容がより良いものとなりグループでもどのように取り組むのか，内容を共有していくことが重要であるといえる。

表３．歯科口腔健康指導の今後に生かすための改善点

カテゴリー	サブカテゴリー	内　　容
進行に関わる全体の把握	準備物の確認をする	忘れ物がないよう朝も確認する
		準備物が足りないと実習ができなくなるので，最終確認まできっちりする
		媒体を使用する順に机に整理しておくようにする
	スムーズな進行をする	しっかり説明をしてスムーズに進行したい
		染めだしの片づけまでの指導は流れを一度紙に書き出して整理する
	全体が見れるようにする	担当グループの子が時間内にできるだけ終わるように全体を見渡すように努力したい
		次回も自分の担当グループをしっかり見るようにしたい

内容の見直し	指導内容を見直す	歯みがきのデモンストレーションでのセリフと動きを一致させるように改善したい
		染めだしの結果，どうして赤くなっているのかを教えたい
	原稿を見直す	歯肉を歯ぐきと言い換えたり，理解しやすい言葉に原稿を見直す
個人の努力	個別対応ができるようになる	一人ひとり進むスピードが違うので遅れている子が追いつけるように手伝うようにしたい
	指導者としての態度を身につける	何をしていいのか分からず困っている子には，積極的に声をかけていく
		赤い所を落とすことに集中し，正しい歯みがき方法ができていない学童に対してしっかり説明したい
		明日は最後なので前をむいて話せるように意識していきたい
		完璧に媒体を発表できるように台本をもっと読み込もうと思う
		体調を整えて実習へ行くようにする

４．歯科口腔健康指導評価表による評価（表４）

歯みがき指導実習後，小学校クラス担任あるいは養護教諭からの評価を得ている。各クラスの担当グループは１グループ５名編成で，クラス担任からはグループの評価を記載してもらい，養護教諭からは小学校に赴いた１～３グループの全体評価を得ている。評価項目は，６項目で，１．児童に対して安全性の配慮ができていたか，２．注目づけ，３．話し方 ①話す速さ ②声の大きさ ③年齢にあった話し方，４．媒体の使い方 ①大きさ ②色彩 ③使い方，５．歯みがきの大切さが児童に伝わったか，６．学生の実習態度 ①言葉づかい ②礼儀 ③服装 ④後片づけについてである。評価は５ 段階であり，未記入は０とし，１ 悪い，２ やや悪い，３ ふつう，４ 良い，５ 大変良いであった。 結果は，各項目に気づいた点を記入してもらうためのコメント欄を設けた。

結果は表４にあるように，全体として評価点４～５がほとんどであった。 評価表のコメント欄でも，「授業の流れについて掲示して説明してくれていたので，発達障害等配慮の必要な子ども達にとって見通しを持って学習をスタートすることができたのは大変ありがたかったです」や「子ども達に寄り添った言葉遣いで指導ができていたと思います」等の記述があった。学内における，事前学習時に発表練習を何度も行い，教室内での見せ方や，原稿の修正を行い学外実習に臨んだ成果であったといえる。 個々の学生の努力が見えるが，グループによっては話す速さについて課題を残している。 また後片づけについて，小学校に忘れ物をしていたことがあり，最終確認を徹底することも課題である。

表４．歯科口腔健康指導の評価表

学校名	クラス	記載者	児童数	1．児童に対して安全性の配慮ができていたか	2．注目づけ	3．話し方			4．媒体の使い方			5．歯みがきの大切さが児童に伝わったか	6．学生の実習態度			
						①話す速さ	②声の大きさ	③年齢にあった話し方	①大きさ	②色彩	③使い方		①言葉づかい	②礼儀	③服装	④後片づけ

A	a	担任	31	5	5	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5
	b	担任	31	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5
		養護教諭		0	0	4	3	4	5	5	5	5	4	4	5	5
B	a	担任	31	4	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5
	b	担任	32	4	4	4	5	4	4	3	4	4	4	4	4	3
	c	担任	35	5	5	2	4	4	5	5	5	4	5	5	5	4
C	a	担任	29	4	5	4	4	4	5	4	4	4	5	5	5	5
		養護教諭		4	5	4	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5
D	a	担任	14	5	5	4	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5
		養護教諭		5	5	4	4	4	5	5	5	4	5	5	5	5
E	a	担任	29	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
	b	担任	28	5	5	4	4	4	5	3	5	5	4	4	5	4
		養護教諭		5	5	5	5	3	4	4	4	4	5	5	5	5
F	a	担任	14	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5
		養護教諭		4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

評価：０：未記入　１：悪い　　２：やや悪い　３：ふつう　４：良い　５：大変良い

考察

１．学童が正確に歯肉の観察ができるための指導

歯みがき指導の重要なポイントは，学童自身が自分の歯肉の観察を正確にできるように指導することである。しかし学生は歯みがき指導時に，全体の流れや，学童全員の口腔状態も見ながら，さらに個々の学童の観察も求められており，学生の関心は学童の歯肉の観察ではなく，学童が何をしているかという行動面に捉われている傾向があると思われる。学童が歯肉を観察する際やブラッシングの際に，個別に声がけをし，一緒に歯肉を観察することや，学童が歯ブラシを持つ手に学生が手を添えた支援等を行う教育的な関わりが不十分であったことがうかがわれた。引率教員はこのような場面では，タイムリーに介入して学生への助言を行い，学生全員が学童に対して，歯肉炎予防の視点で歯肉の観察や正しい歯みがき方法の支援ができるように指導する。学齢期中学年の学童は乳歯から永久歯への交換時期であり，口腔内の状態は個別差の大きい年齢のため，学生自身苦慮する内容ではある。ゆえに，事前の学習において，学齢期中学年の口腔内の特徴を十分理解しておき，学童に対して指導する内容の歯肉炎の原因が歯垢であること，歯肉炎を予防するためのブラッシング技術を確実に伝えることで，歯みがき指導がより一層充実した実習内容になるといえる。

この歯みがき指導は，学生にとっては，学童に伝える技術を学ぶことができる，有効な学習場面になっているのである。

歯みがき指導終了後に，行政や養護教諭から得た感想や改善点として，「学童が綿棒を使って前歯を染め出す時に歯と歯肉の境目をしっかりと赤く染め出すことが出来ているか」，「学童が学習プリントに前歯の汚れがついている場所を書き込む時に，歯と歯肉の境目をよく見て書き込みができているか注意深く観察してほしい」という内容があった。ブラッシング指導時の染めだしはていねいに歯と歯肉の境目に塗布することで，みがき残しを明視化でき，学童への意識づけや次の保健行動へつなげるものである。長谷部ら[3]の研究でも，自分の磨き方の癖やどこに磨き残しが出やすいのかを歯科医院で指導してもらい，それを踏まえた上で毎日のセルフケアを実行すれば口腔の健康を長く維持できると述べている。学生は，学童

自身にみがき残しの部位をしっかり認識してもらい，健康な歯肉になるための方法を理解してもらうため，帰校後に振り返りを行っている。小学校や行政の担当者からの意見も踏まえて原稿等の修正を行うなど次回へ向けての改善・努力を行った成果が，評価表において概ね良い評価として現れたと思われる。

歯みがき指導において， 学童が正確に歯肉の観察ができるようになることによって，将来においても，歯肉の観察を意識して行い，正しい歯みがき方法で継続した保健行動が取れるようになると考える。そのために学生は，歯肉炎予防のための歯肉観察の重要性を認識し，学童に指導しなければならない。

２．正確な知識と技術の習得への指導

長谷ら[4] が，歯科衛生士は今まで以上に医学的知識を学び，健康教育の一環としての口腔保健教育を担える能力や，ライフステージに適した保健行動を取り得る能力が必要であると指摘している。本学学生は実習前に対象者の年齢に応じた心や身体の発達や，口腔内の状況について学習をしている。

小学校において学童の成長は様々であり，学童が活動内容のスピードについて行けなかったり，内容が理解出来ずに戸惑っている場面もみられる。口腔内においても乳歯から永久歯への交換時期であり，個人差が大きいことを理解した上で学生は，学童一人ひとりの口腔内を見て，歯並びや歯肉の状態に関する情報を得て判断し，個別指導を行うことが重要である。長谷部ら[5] も，歯並び，歯肉の状態などに関する情報をできるだけ収集し個人にあった指導を提供することが大切であると示している。しかし，学生はできなかった点の中で，カテゴリー［個人レベルの努力事項］のサブカテゴリー『説明がうまくできなかった』で「歯みがき方法の説明が学童にうまく伝えられなかった」，「出血のある子どもに対して，少し不安にさせるようなことを言ってしまった」等が抽出されている。そこで，学生が効果的な対応できる力を身につけるために，教員は学生が事前学習として取り組んだレポート課題の内容のフィードバックを行うとともに，正確な知識や技術の習得を目指した学習時間を確保することが必要であると考えられる。

３．指導案の熟知

指導案は教員が提示しており，学生は45分間の指導内容の時間配分や役割分担を決め，学外実習前の練習を行っている。この時，グループ内での協働学習やチームワークの必要性を学んでほしいと考えている。伊ケ崎ら[6] は，グループワークの大切さや楽しさを学生のうちに学ぶことも重要な指導の１つであると述べている。 学生が，スムーズな流れで歯みがき指導を行うためには，グループ全員が指導案を熟知し，誰がどの役割をすることになっても臨機応変に対応することができるためにも，メンバーの指導内容を共有しておく必要がある。

臨地・臨床実習の有効性について日下ら[7] は，実習前にロールプレイなどの演習を充実させて各世代に対応できるよう教育を工夫する必要があると述べている。

今後の学外実習におけるグループ活動の内容を強化するためには， ロールプレイを行い学生が歯みがき指導の指導案全体を十分に理解して，実習をすることで教育効果が向上すると思われる。

４．指導法の習熟

学生は，できなかった点の中で，カテゴリー[指導者としての態度］のサブカテゴリー『指導者としての態度が不十分だった』の内容で「笑顔でできなかった」，「染めだしの説明をする時に黒板ばかりを見てしまって学童の方を見ていなかった」等が抽出されている。 また，今後に生かすための改善点の中で，カテゴリー［個人の努力］のサブカテゴリー『指導者としての態度を身につける』の内容で「明日は最後なので前をむいて話せるように意識していきたい」も抽出されている。発表練習時には常に，相手の立場に立って学童の方を

向いて話をすること，学童が指導内容を理解できているか様子を見ることなどの重要性を教示している。学生は学外実習において，分かっているが行動に移せていないことを自己評価をしている。歯みがき指導時の学生の緊張感をほぐす工夫点については，今後の課題である。

また，学生自身の指導力を身につける為には，既存の授業科目時間内に指導法についての内容を組み入れ，ロールプレイを何度も行い，質の高い支援や援助ができるよう教育内容の充実を図る必要性が明らかとなった。

５．アクティブラーニングの取り組み

須田ら[8]の研究の中で，学齢期の集団指導は歯科衛生士学生にとっても，学生自身が課題を見つけ学習意欲につなげていくことができ，教育効果があると述べている。本学学生も小学校での歯みがき指導実習が，指導者としての体験を重ねることとなり，知識を深める，学童に伝えるスキルを学び，課題や解決法を習熟することができる有効な学習場面になっている。

今後，小学校における歯みがき指導実習前に，前年度に歯みがき指導を行った学生の自己評価の内容と，小学校の先生方からの他者評価の内容のポイントをピックアップしたものをフィードバックして更に解説を加え事前学習を充実させていく必要があると考えている。

学生が主体的に学び，問題を発見し，解決していくためにはアクティブラーニングの取り組みが大切であると考える。

過去に，特別支援学校における３年次学生の学外実習の様子を２年次学生が見学する方法を取ったが，２年次学生は，学外実習の様子を見学することで，イメージが湧き，指導案の流れも把握でき，学童への接し方や支援の方法など対面的な理解もできていた。つまり，前年度の学生の自己評価と他者評価の情報を得たうえで，学外実習先での３年次学生の活動の様子を見ることで，主体的，能動的に学習する姿勢を身につけることが可能となったと考えられる。

有井ら[9]の研究においても，実習の到達度を高めるために，各学年の行動目標を示すことは必要であることや２学年に渡る反復学習の機会を得ることでさらに理解が深まると述べている。

今後の取り組みとしては，歯みがき指導前の学生に対して，学外実習の手順を踏まえ，グループでの話し合いを重ね，ロールプレイを行い学外実習に臨むようにする。また，学外実習終了後には，自己評価や他者評価を受けてグループ内で話し合い，改善すべきところを修正し，次の学外実習に生かしていく。３年次で行う歯みがき指導においては，２年次に行った際の自己評価内容を確認して振り返り，学生自身の行動目標を立て歯みがき指導に臨むようにする。このような取り組みによって，２学年に渡る反復学習の効果が見えてくると思われる。

謝辞

本研究の実施にあたり，学生の歯みがき指導の場を提供していただいた，行政をはじめ小学校の先生方に御礼申し上げます。

また，論文を作成するにあたり，助言をいただきました本学参与梶本市子先生に心より感謝し，御礼申し上げます。

引用文献

１）文部科学省，学校歯科保健参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での歯・口の健康づくり http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1306937.htm（2018年11月25日アクセス）

２）佐藤公子，小学校における歯科保健教育の効果と教育方法の検討，*小児保健研究*，**2010**，69(4)，544-552.

３）長谷部はるか，金子潤，ブラッシングにおける利き手による磨き残し部位の比較，*明倫短期大学紀要*，**2012**，15(1)，70-75.

４）長谷徹，嶋野浪江，鈴木幸江他，歯科衛生学科３年制カリキュラム編成の要旨と求められる歯科衛生士像について，*湘南短期大学紀要* **2006**，17，51-57.

５）前掲３）70-75.
６）伊ケ﨑理佳，石渡弥久，片岡あい子他，集団歯科保健指導への取り組み，*湘南短期大学紀要*，**2007**，18，15-24.
７）日下和代，石郷岡友美，鈴鹿祐子他，臨地・臨床実習の有効性についての検討：学生の自己評価から，*千葉県立衛生短期大学紀要*，**2008**，26(2)，21-31.
８）須田真理，出田亜紀子，池澤陽子他，学齢期における健康教育行事を活用した教育の取り組み：第１報　歯科保健指導論の一環として実施したケースの分析から，*日本歯科衛生教育学会雑誌*，**2012**，3(1)，77.
９）有井真弓，平田久美，合場千佳子他，学童期における健康教育行事を活用した教育の取り組み：第３報 参加校とＫ校の学習評価を比較して，*日本歯科衛生教育学会雑誌*，**2015**，6(2)，166.

受付日：平成30年12月20日
受理日：平成31年２月18日

Bulletin of Kochi Gakuen College, No. 49 (2019) : pp.45-58

Report

The Learnings and challenges which the junior college students got through the toothbrushing guidance for third grade elementary school children

Kayo NOMURA[1*], Mayumi SAKAMOTO[1], Yuko NAKAISHI[1] , Saki WAJIKI[1], Tomoko UCHIDA[1] and Yuka OONO[1]

Abstract: The toothbrushing guidance was started for third-grade and fourth-grade children at elementary school from 2010. This guidance was intended under the cooperation with X City Board of Education, X City Health Center, X City Elementary Schools, and Department of Medical Hygiene, Dental Hygiene Course of Kochi Gakuen College. These children were in the time of replace in to permanent teeth from primary teeth. The second college students in 2017 conducted toothbrushing instruction to the third-grade children of 6 X city elementary schools. College students reviewed their own instructions as well as their impressions after each instruction. We clarified them that what students acquired from instruction and if what challenges exist in their toothbrushing instruction, by categorized their reviews using KJ methods. We also obtained evaluations/scores by homeroom teachers and school nurses, and then we analyzed them. We cleared what should be improved on, what college students were able to do, and what they could not do, during toothbrushing guidance. As a result, we should tell at the time of teaching to students are to teach properly the method for school children to accurately observe gingiva, to provide guidance so that accurate knowledge and skills can be acquired, to be familiar with the teaching method, to familiarize the approach of active learning

Key words: dental hygiene, junior college student, toothbrushing guidance

[1] Kochi Gakuen College, Department of Medical Hygiene, Dental Hygiene Course, Email: nomura@kochi-gc.ac.jp